

2019年11月24日 礼拝メッセージ

聖書:テサロニケ人への手紙第二 2章13~17節

説教:主が慰めてくださる

はじめに

ギリシャの港町であるテサロニケにパウロが立ち寄り、福音を語ったところすぐに多くの人たちが信じて教会が建てられました。町に住むユダヤ人たちがこれを見てパウロを激しく迫害して町から追い出し、次にはその迫害の矛先は教会に向けられました。教会に指導者がいなくなったということだけでも大変なことです。迫害という厳しい試練のなかで信仰を守っていけるだろうか。パウロは心配します。それで同労者テモテが教会の様子を見てきます。返ってくると、彼らは迫害にあいながらも信仰を捨てず忍耐していた、そのようにまず報告する。ところがやはり問題も持ち上がっていました。もう間もなく主が再臨される、いやもうすでに主は再臨されている、そのようなことを言ってまじめに働くのをやめてしまう人たちが出て、そのことで教会全体が揺れ動いていたのです。それでパウロはこの手紙を書くことになりました。

先週は、2章の前半を開き、まず不法の者が現れなければ主の再臨はないのだから、どんなに主の来臨の噂を聞いてもだまされてはならないこと。また主の再臨の時に私たちは真理を信じる者と信じない者の二つに分けられること。その真理とは、神によって示された罪をただ告白していくこと。この三つのことを見てまいりました。今日はその続きです。

## 1 感謝する理由

あの有名なパウロが開拓した教会ですから、さぞかししっかりとした信仰に立っていたのかと思っていたら、大きな問題をかかえていたと聞き意外に思うかもしれません。しかし問題のない教会はないと言われます。私たちは救われてはいますが、なお罪人の集まりですからさまざまなことが起きることは避けられません。大切なのは、問題が起きたときにどうするかです。パウロどうしたのでしょうか。13、14節を読みます。

「しかし、主に愛されている兄弟たち。私たちはあなたがたのことについて、いつも神に感謝しな

ければなりません。神が、御霊による聖別と、真理に対する信仰によって、あなたがたを初穂として救いに選ばれたからです。そのために神は、私たちの福音によってあなたがたを召し、私たちの主イエス・キリストの栄光にあずからせてくださいました。」

何か問題が起きると、よくあることですが悪いところばかりに目を向けてああだこうだと言いたくなるものです。でもパウロはどうしたか。問題が起きたからだめな教会だと切り捨てません。問題点を指摘しながら、それでもなお感謝すべきところがあるということを忘れません。何を感謝したか。パウロは、救いに関して三つの側面から表現しています。

### 1) 初穂として救いに選ばれた

一つ目は、「あなたがたを初穂として救いに選ばれた」ことです。聖書には「初穂」というのは読んで字のごとで「初めての収穫」「初めての実」という意味です。これは二つ意味が考えられて、テサロニケで初めて救われた人たちという意味と、神の創造の初めから救いに定められていた、それで「最初から」と意味。いずれにしても、テサロニケ教会は御霊の働きと、真理に対する信仰によって救われたとパウロは評価しています。この真理については先週も触れたとおりです。私たちは真理を行うことはできない、私たちのうちには真理がない、そのことに気がついて悲しむ者である。そのことを認めて救われた。それが感謝の一つ目です。

### 2) 召した

二つ目は、「そのために神は、私たちの福音によってあなたがたを召した」ことを挙げています。パウロを通して語られた福音を聞いて、人々が救われたわけですが、パウロは自分で救ったとは決して言いません。みことばを語ったのは自分ですが、召したのは神である。どんな者が神に召されたのか。強い者が召されたのではない。弱くて欠

けが多く、とても召しにふさわしいとは思えない者が召された。だから感謝します。

### 3) 栄光にあずかる

そして三つ目の感謝は、「神は、私たちの主イエス・キリストの栄光にあずからせてくださった」ことです。

ここに主イエス・キリストの栄光とあります。これは何か。ヨハネの福音書12章23、24節にこう書かれています。「人の子が栄光を受ける時が来ました。まことに、まことに、あなたがたに言います。一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままです。しかし、死ぬなら、豊かな実を結びます。」「人の子」とは、イエス・キリストがご自分をさして言うときの独特の表現です。これを読むと、主の栄光とは十字架の死と復活のことをさしていることは明かです。主が現してくださった死と復活はやがて私たちにも与えられる。それが、主の栄光にあずからせてくださった、の意味です。

## 2 しっかりと守る

### 1) ですから

パウロはこのように三つの感謝を語ってから15節に続きます。「ですから兄弟たち。堅く立って、語ったことばであれ手紙であれ、私たちから学んだ教えをしっかりと守りなさい。」

ですからとは、13、14節を指します。私たちは救われ、召されて主の栄光にあずかったのだから、私たちから学んだことを教えあってしっかりと守りなさい。そう言っている。

ここに教会の大切な役割が示されています。パウロを通して語られた神のみことばによって人が救われ、教会が建てられました。そして今度は教会が神のみことばを世に語り、神が救って召してくださった人々を集め、その次に、集められた人々を教え、守るよう指導していく。これが教会の役割であると教えています。

### 2) みことばを

いったいなにを教えるのでしょうか。「私たちから学んだ教え」とあります。この手紙を読んでいるのは、ほとんどがテサロニケに住んでいたギリシャ人です。異邦人ですから旧約聖書の知識はあり

ません。またこのころはまだ新約聖書はありません。パウロの口を通して、聖書を教えてもらった。それをこんどは自分たちが教えあってしっかりと守っていく。私たちも同じです。

この教会では、特別な場合を除いていつも聖書を開いて学ぶようにしています。仮にテキストを用いるとしても、聖書を土台としたものに限られません。どうしてか。そこに永遠に朽ちない真理のことばが記されているから。ある人は古くさいと言います。確かに新約聖書は二千年前に書かれ、創世記に至ってはいまから三千五百年前に書かれたといわれる。科学の時代にそんなカビの生えたものを読んでどうするのか。昔の人は愚かで迷信を信じやすかった。それで神というありもしないものをまるで本当にあるかのように書いてあるだけだ。世の人たちはそう言います。

しかし聖書はなんとやっているか。第一コリント1章21節。「神の知恵により、この世は自分の知恵によって神を知ることがありませんでした。それゆえ神は、宣教のことばの愚かさを通して、信じる者を救うことにされたのです。」

神がこう語ってくださるので、私たちは世の人からなんとわれようと自信を失う必要はない。聖書にこだわり続けます。

## 3 慰めてくださる

### 1) 神の慰め

次に考えたいことは、どのような意味があつてみことばを互いに教えあうのか、です。それが16、17節に書いてある。「どうか、私たちの主イエス・キリストと、私たちの父なる神、すなわち、私たちを愛し、永遠の慰めとすばらしい望みを恵みによって与えてくださった方ご自身が、あなたがたの心を慰め、強めて、あらゆる良いわざとことばに進ませてくださいますように。」

ここに「慰める」ということばが二度繰り返されていことに注目します。パウロの手紙は、とにかく無駄な言葉は極力使わないところに特徴があります。ぎりぎりまで削る、あまりにも削りすぎて、読むのが大変なくらいです。そういう人が、「慰める」を二度ここで繰り返すのですから、よほど大切なことと考えるべきでしょう。

私たちも、「慰める」ということばを使います。悲しんでいる人のそばに行って「大丈夫だから」とか「大変だね」とか声をかけて慰める。あるいはこんな言い方もする。「あなたの問題はきっと解決するから元気を出しなさい。」皆さんも心当たりがあるかもしれませんが、そうは言ってみただけれど本当に解決するのだろうか。確かな根拠があるわけでもないのに、とにかく元気づけるために口からぼろっと出てしまうことがある。それでもこれも「慰め」の一種と言うでしょう。

神はどうなのでしょう。私たちが時々してしまうように、根拠のないことばで「元気を出しなさい」と言う方なのか。とんでもありません。もし神がそのような方ならば、教会に来るのは止めた方がよい。神が私たちを慰めるというのならば、もちろん確かな根拠をもっている。神が私たちを慰めるというのならば、嘘やでまかせでは決してない。本当のことば、永遠の昔から永遠の未来に至るまで朽ちることのない真理のみことばをもって慰めます。

## 2) みことばと聖霊

ではいったいどのようにして私たちに慰めるのでしょうか。やはり、「元気を出しなさい」という慰めでしょうか。もちろん聖書の中には、そういう言い方をするときもあります。でもそのとき必ず私たちが病んでいて痛んでいる原因である罪に触れていく。私たちの罪を示しながら慰めていく。飴と鞭ということではない。本当の慰めは罪を取り扱わない限り得られないことを神が知っておられるからです。

もちろん、私たちは最初は痛くて触れたくありません。抵抗します。見ないようにします。でももう一人の慰め主である聖霊が私たちのうちに住んでくださって、真理の方向に私たち向くように励ましてくださる。そのようにしてやがて罪を主の前に告白することができたとき、私たちはどうなるのでしょうか。みなさんは既に知っています。主に告白したとき、私たちはどれほどの重荷を自分で背負っていたのか初めてわかる。あまりの重さに息も絶え絶え、苦しんでいた自分に気がつく。荷を降ろして初めて自分の身体がこんなに軽かったのか

と驚いて喜ぶ。このようにして主は私たちに慰めてくださる。

二千年前の教会も、今の教会も全く変わりません。これからも教会はいろいろな課題に直面するでしょう。でも、私たちのすることは同じです。みことばを教えあつて、守っていく。そこから主の慰めを味わっていくとき、私たちは主に救われた喜びをまた新たにされ、信仰をいただいていたことに感謝することになるでしょう。主が私たちとともにおられることを教会の皆さんと一緒に味わっていく。そのような歩みに進みたいと願います。